



きらめく風

すすんで学ぶ子ども 心ゆたかな子ども 体をきたえる子ども

一人になる時間

旭町小学校 副校長 吉井 広明

6年生を送る会に向けて子供たちが「ビリーブ」の練習をしています。歌の冒頭に「たとえば君が傷ついてくじけそうになった時は かならずぼくがそばにいてささえてあげるよ その肩を」という一節があります。私もこんな「ぼく」でありたいし、子供たちにもこんな「ぼく」になってほしいと思うと同時に、「ぼく」みたいな友達を作ってほしいとも思います。

先日、「練馬区いじめ防止実践事例発表会」に参加しました。そこでは様々ないじめ防止実践事例が紹介されており、大変参考になりました。発表を聞きながら、ふと思ったことがあります。それは、私が若い頃と違って今の若者はうらやましいと思う反面、かわいそうだなということです。なぜかということ、昔に比べて一人になれる時間が少ないからです。携帯電話やスマートフォンの普及に伴い、家にいても外出中でも、寝る前でも友達と連絡を取ることができます。私は高校生の頃、友達と約束をして駅で2時間待ったことがあります。結局その友達は来ず、翌日学校で平謝りされました。あまりにも待たされすぎたせいか、大して腹も立ちませんでした。待ち合わせ場所が駅だったのでほかにも待ち合わせをしている人がいて、あの人は相手が来た、あの人はまだ来ない、など人間ウォッチングをしているうちにあっという間に時間が過ぎました。今なら、SNS等を使って「今日は行けない」と連絡すれば済む話です。こういう点では便利ですが、昼夜を問わず連絡が取れるのはすなわち一人になれる時間がないということです。友達とのかかわりも大切ですが、一人で勉強したり、読書をしたり、考え事をしたりすることも同じくらい大切だと思います。SNSが発達した結果、昔と違って子供たちは家に帰れば一人の時間が持てるわけではなくなりました。携帯電話やスマートフォンの使い方のルールを決めて子供たちに自分の時間を作ってあげることが必要だと思います。

書き初めの取り組み



なわ跳び月間

